s u g a r c o a t

綾瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｕｇａｒｃｏａｔ

【Ｎコード】
Ｎ６２５６Ｄ

【作者名】
綾瀬

【あらすじ】
振られて傷心の男子高校生に声をかける少女の話

背筋も伸びそうなキンとした寒さの中で、俺は背を丸めて溜息を吐く。
するりと伸びきったところでふわりと空に舞い上がるはずの白い息がきゅっと小さな形を持って、足もとに落ちたと思った。
雪が降ってきた。窓を開けてベランダに投げた足の先が冷えている。
さすがに裸足はきつい。
「いょう。少年、なにしてんの？」
「うるさい」
俺の横から軽い声が飛んでくる。
「なんか寒いと思ったら、雪降ってたんだ。寒くないの？」
俺の裸足を指差し、不敵に笑う。ヤツはお隣さんの女子中学生。
俺の部屋は二階で、窓を開ければすぐにベランダ。土地の狭い日本の物件らしく、隣の家とは数メートルしか離れていない。ベランダの真横に隣の家の窓があり、声の主はそこから身を乗り出していた。
「受験生なんだから、勉強してろ」
「もうしたって。それに志望校は安心っていわれてるんだから、そんなに真剣にやんなくていいの」
志望校は今、俺が通っている高校らしい。俺は家から近いという理由で頭が足りないというのに進学校を受験し、なんとか合格の身の上なのに、こいつは予備校の模試でもＡ判定を受けている優等生。おまけに憎たらしいほど顔がいい。親の顔が見てみたい。いや、もう見てるけど。美人な奥様ですこと。
「ま、私には滑り止めみたいなものだしね」
顔はいいが、口が悪い。外面がいいので、学校での評判は上々。よく告白されるらしいが、同じ小学校出身者からはされないそうだ。
そりゃそうだ。正体を知っているのだから。
「また振られたの？全戦全敗じゃない」

「本当にうるさい」
ええ、そうです。なにも考えられなくなるように、寒さで頭を冷やしていたところです。
部屋の写真立てには彼女もいる集合写真が飾ってあって、拒まれて傷ついているくせに写真を捨てることができず、結局俺から視線を反らせて外を見ていた。
振られることの何が悪い。こうして男はどんどん打たれ強くなるのだ。どんとこい。けど、時々は受け入れられたい。甘い感覚を味わいたい。
「私なんか先週、他校の人に告白されたよ。一目惚れなんだって」
「そりゃ、お前には一目惚れしかないだろ。性格悪すぎ」
クッションが飛んできたので、それをキャッチする。俺は昔からこいつのことを知っているので、特になにも思わない。美人ではあるが、俺はかわいい子がタイプだ。
「どうなのって、聞かないの？」
彼女の声が珍しく小さい。
「なにが？」
「だから、そいつと付き合うのかとか」
むーとむくれて、また窓から物を投げようとするので、気のない声で「付き合うのか？」といった。
彼女は納得のいかない顔で「断ったよ。私、他に好きな人がいますって」と早口で返答する。今度はゲームセンターの景品のぬいぐるみが飛んできた。
「お前、よく断るよな。まだ一度もＯＫしたことがないんじゃない？」
こんなところに敵が。
「だって、その人以外は好きじゃないんだもん。中途半端に付き合うわけにもいかないでしょ」
彼女は顔を部屋側に背ける。こういうとこは真面目なんだよな。それとも本当の姿の情報をむやみに流出させないためか？どっちかっ

ていうと、そっちの可能性が高い。
「いいよな。もてるやつ」
「いい？」
こちらを見て、ぱっと笑う。
「いいって、どのへんが？」
そこに食いつかれても。
「もてるやつは超うらやましい」
正直にいったのにも関わらず、「なあんだ」と彼女は肩を落とす。
「あんたさー」
俺はクッションを胸に、ぬいぐるみを脇に置いてこれらの持ち主を見上げる。彼女は窓の桟に置いた腕に顎を乗せて小首を傾げ、いつになくしおらしい姿勢を見せた。
「鈍いっていわれない？」
だけど、毒舌。
「いわれる、けど…」
ぬいぐるみがぱたりと倒れる。
「明るいんだけど、失礼で無神経。付き合ったら、その一部始終を周りにしゃべりそうっていわれない？」
言葉が出ない。今回、告白した子にはそういわれて振られた。なんという洞察力。
「裏表がなくて、いいとこもあるんだけどね」
彼女なりのフォローなのだろうが、「お前は裏表ありすぎ」と返す。もてる人間にはわかるまい。この孤独を。
強気な言葉が来るだろうと思って身構えるが、一向にその気配がない。強い風が吹く度に雪は強くなる。彼女の姿を隠そうとする。ショックよりも寒さの方が辛くなってきたので、部屋に戻ろうと俺は立ち上がった。
「いいとこ、あるんだよ」
彼女の声はわずかに震えていた。
「ちゃんと受け取って」

雪の向こうで彼女が腕を振る。なにかを持っているようだ。二、三回振ってから大きく肩をまわして、こちらにそれを投げた。寒さで動きにくいなか、なんとか受け取る。
「風邪、引いたら困るから」
じゃあねといって窓を閉め、足早にその場を離れていった。
なに、今の？と手の中を見る。投げてきたのは手の平サイズのガラス瓶で、ラベルには市販されている風邪薬のロゴがあった。一家に一つ、一日三回が売り文句の糖衣錠。瓶はすでに開封済みで、薬は十錠程度しかない。そして、新品にはないものが入っていた。何回も折りたたまれた紙が入っている。
その場で瓶を開けて、紙を取り出す。
「また変なものを」
苦笑いして、かじかむ指で紙を開く。
まっ白いと思われた紙には縁に小さな花のイラストがあった。便箋のようだ。
手の平の中の瓶がカラリと音を上げる。
便箋の中央には控え目な文字で、短い文章が書いてあった。

女の子は砂糖菓子でできている。そんな童謡があったけれど、この女の子は薬のように甘いらしい。
苦味をごまかす砂糖のコートを纏った彼女。その苦味も相手のことを思ってのことなのだから、いいのかもしれない。

＜了＞

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6256d/

ｓｕｇａｒｃｏａｔ

2010年10月11日02時54分発行